

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 3 月 12 日	
所属部局・職	霊長類研究所人類進化モデル研究センター・技術職員
氏名	夏目尊好

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)	
日本 (熊本県)	
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
チンパンジーの飼育研修および施設見学	
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)	
平成 27 年 3 月 5 日 ~ 平成 27 年 3 月 7 日 (3 日間)	
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
熊本サンクチュアリ、鶴殿俊史 (獣医師) 野上悦子 (技術職員)	
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果: 長さ自由)	
<p>写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>研修の最初は、飼育担当職員の寺本氏に説明していただき、チンパンジーの朝食と放飼の様子を見せていただいた (写真 1)。放飼前には放飼場内にミカンやハウレンソウを隠したり、ジュース用フィーダーに高栄養ドリンクを入れたりするなど、多くのエンリッチメントが準備されていた。私もミカンとハウレンソウを隠す作業を手伝ったのだが、いつもの隠し場所とあまりにも異なる場所に隠したためか、食べ物を見つけられなかったチンパンジーに怒られてしまった (写真 2)。いつもと異なる刺激を提供できて良かったと思った。</p> <p>寺本氏の後は、獣医師の鶴殿氏が熊本サンクチュアリの施設を案内して下さった。霊長研とは異なり、熊本サンクチュアリは全てがチンパンジー専用設計されているため廊下が広く、扉も大きいのが印象的であった。また、チンパンジーたちの居室と放飼場を繋ぐ通路の途中に設置されている治療用ケージは、チンパンジーがそこに長期で滞在することになってもチンパンジーにも作業員にも大きなストレスが生じないような工夫が多く施されていた (写真 4)。これらの工夫はチンパンジーに限らず、マカクにも応用して霊長研でも取り入れたいと思った。</p> <p>施設案内の途中、昨年熊本サンクチュアリにやって来たボノボも見せて下さった。今まで研究者の発表や文献等でボノボに関する知識を得てはいたが、実際に見るのは初めてであった。私が想像していたよりもボノボの身体は小さく、顔もチンパンジーと比べるとおっとりとした優しそうな顔をしていた。また、鳥のような高い声でなくのはとても驚きであった。初めて見る私たちのことをそれほど警戒することもなく、鶴殿氏を追いかけっこ遊びに誘っていたことが、とても微笑ましかった (写真 5)。</p> <p>午後からは、飼育担当の野上氏にチンパンジーの心電図計測と樹木を使ったエンリッチメントを見せていただいた (写真 5、6)。野上氏の心電図計測を見学していて一番驚いたのは、チンパンジーとの距離が非常に近いことであった。野上氏はケージの格子に開けられた穴から手を入れ、チンパンジーの身体のあちらこちらを触っていた。チンパンジーもそれを嫌がる様子は特になく、心電図計測のための針金を胸に当てることもすんなりと受け入れていた。チンパンジーたちとこれほど親密なコミュニケーションを可能にするには、</p>	

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

とても長い時間を彼らと過ごし、根気よく信頼関係を築くことが必要だと考えられた。

今回、初めて熊本サンクチュアリで研修し、多くのことを学ぶことができた。チンパンジーのために工夫された施設やチンパンジーとの関係作りは、健康で快適な暮らしを彼らに提供するためであり、それはチンパンジーの研究にとって非常に重要な要素であることも再認識した。このことは同様にマカク類や小型ザルの研究にも必要なことだと思うので、今回の研修での経験をこれからの霊長研での業務に活かしたいと思う。



写真 1. 調理室の様子（柑橘類が豊富）



写真 2. 食べ物を探すチンパンジー



写真 3. 居室と放飼場の通路にある治療用ケージ



写真 4. 鶴殿氏を遊びに誘うボノボ



写真5. 樹木を使ったエンリッチメント



写真6. 手をケージ内に入れて心電図計測をする野上氏

6. その他 (特記事項など)